

厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

総合研究報告書

男性不妊の実態及び治療等に関する研究

研究協力者 山本泰久 鳥取大学 泌尿器科

研究要旨

1998年の当施設の男性不妊症の病因、検査、治療と1999年のMESA、TESEの状況についてまとめた。当施設における1998年の不妊症患者は28例で、全初診患者に対する割合は2.9%であった。病因は、精巣因子が最も多く92.1%であり、精路因子、性機能因子は7.1%にすぎなかった。治療はTESEと補助生殖技術を用いたものが20例71.4%に施行されていた。のこりは手術療法14.3%、非ホルモン療法10.3%、ホルモン療法3.6%であった。1999年はMESAは施行おらず、TESEは25例に行われこのうち7例28%が妊娠した。また明らかな先天異常は認めなかった。MESAはその手技の煩雑さ、侵襲の大きさなどからTESEにとって代わられた。またTESEを用いた補助生殖技術の成績は満足のいくもので、今後も積極的に行っていききたい。

当施設は他施設に比べTESE施行例が多いと思われた。さらに症例を増やし検討していききたい。

A. 研究目的

補助生殖技術の発展は男性不妊症の治療に著しい発展をもたらしした。特にMESA、TESEの導入は従来絶対不妊であった患者にも子供をえることを可能性にした。これらのことが男性不妊治療にいかなる影響を与えたのか明らかにするため調査を行った。

当施設における1998年の新患者964例のうち不妊症患者は28例で、全初診患者に対する割合は2.9%であった。病因は、精巣因子が最も多く92.1%であり、精路因子、性機能因子は7.1%にすぎなかった。治療はTESEと補助生殖技術を用いたものが20例71.4%に施行されていた。のこりは手術療法14.3%、非ホルモン療法10.3%、ホルモン療法3.6%であった。TESEによる妊娠率は4例20%であった。1999年はMESAは施行おらず、TESEは25例に行われこのうち7例28%が妊娠した。また明らかな先天異常は認めなかった。

B. 研究方法

1998年の当施設の男性不妊症の病因、検査、治療と1999年のMESA、TESEの状況についてまとめた。

C. 研究結果

#### D. 考察

従来男性不妊外来患者の割合は1%前後とされちるが、当施設は不妊専門外来をもうけ積極的に不妊治療を行っているためか、2.9%と高率であった。病因は精巢因子が90%以上を占めており、やや特異的ではあるが、これは他因からの難治症例の紹介や、これまでの治療で無効であった患者の受診が多いためと思われる。さらにこの精巢因子の1例を除いた全てが非閉塞性無精子症である点は、不妊症専門の施設と比較しても当施設の大きな特徴である。これは当科では1996年の日本ではかなり早くTESEを用いた顕微授精を始めたからと思われる。

TESEと卵細胞質内精子注入法を組み合わせた方法での妊娠率は1998年20%、1999年28%と概ね満足できる成績であった。またMESAはこの兩年には施行されてなかった。これはTESEと比較して手技が煩雑であること、侵襲が大きいことが原因と思われる。

#### E. 結論

当施設は難治例の非閉塞性無精子症が多いこと、さらにTESE施行例の割合がおおきかった。またTESEの有効性も確認できた。

#### F. 研究発表

なし

#### G. 知的所有権の取得状況

なし